

報告

ACMP(アジアコンピュータ音楽プロジェクト)の構想 A PROPOSAL FOR ASIA COMPUTER MUSIC PROJECT

小坂 直敏

Naotoshi Osaka

東京電機大学

Tokyo Denki University

概要

コンピュータ音楽の分野では、10年ほど前までは数少ない国際会議に研究者も音楽家も集い、情報交換、あるいは互いに知り合う場として機能したが、現在では、さまざまな「国際会議」や「国際イベント」が誕生し、発表の機会も以前より増えている。しかし、わが国には同分野で創作系の国際会議が近年開催されていない。一方、東アジアの隣国では、同分野の国際会議はあるものの、国際会議とは名ばかりで、現実には国内会議の域を出ていない。こうした現状を踏まえて、アジア地域の身の丈にあう同地域を中心とした音楽祭 ACMP (Asia Computer Music Project) を提案する。このプロジェクトは、まず本年10月12日に日韓の合同イベントとして発足した。これをさらに発展させるため、このプロジェクトへの参加を広く呼びかける。

Since the birth of computer music, the constant progress of technology and music itself have made music to be in a state of constant change. The international conference has functioned well as a medium for music presentation. Before the last decade, only a few international conferences and festivals existed and all musicians attended. Presently, various kind of international events are running and presentation opportunities increases. Despite all of this, Japan is not organizing these conferences. On the other hand, neighboring Asian countries are organizing international conferences. However, these are mostly domestic conferences as opposed to real international ones. Judging from such an analysis result, A regional event, ACMP (Asia Computer Music Project) is proposed. ACMP 2010 Korea and Japan was held on October 12th, this year. A report on this event and a future plan is discussed.

1. はじめに

コンピュータ音楽が誕生して以来、技術の発展とともにその音楽も発展し変容を遂げてきた。また、その担い手も裾野が広がり、それまで一部の国の一部の研究室やスタジオでしか実現できなかったことが、現在では、あらゆる大学の研究室や個人にまで音楽制作の機会が広がった。その結果、コンピュータ音楽およびその隣接分野に携わる人々の数が増加し、音楽に関する学会の数は、この10年で飛躍的に増加した。

しかし、コンピュータ音楽のみに限定すると、その従事者が単純に増加している、とはいえない状況がある。とくに、わが国では、メディア系のさまざまな会議の狭間にあつてコンピュータ音楽の制作系の国際会議が開催されていない。そこで、以下では同分野を取り巻く国際会議を概観しながら、ここに起こる問題点を指摘する。また、それを解決するために新たな国際会議の枠組み ACMP について提案する。

2. 国際会議の現状

ここでは、音楽を中心とした国際会議について簡単に紹介する。関連会議を網羅したいが、音楽祭などの制作系の発表も含め、規模の大小も問わなければ全貌を紹介するのは無理なので、その一部を紹介するにとどめる。

表1は、音楽に関連する国際会議のいくつかを新旧含めて紹介したものである。AES (Audio Engineering Society)[1] は音楽に特化したものではなく、むしろ音楽制作のための音響信号に関する技術発表としてふさわしい場がまだない頃の発表先であった。したがって、FM音源技術などは、本雑誌に掲載されている。その後、ICMC (International Computer Music Conference)[2] が誕生した。これは音響合成などの技術発表と音楽作品発表(コンサート)が併設され、作曲家が関与する国際会議としてのスタンダードとなった。一方、いちはやく

表 1. 音楽関連の国際会議

会議 名称	対象分野	開始 年	開催 年度
AES ^[1]	オーディオ	1948	毎年
ICMC ^[2]	コンピュータ音楽全般	1974	毎年
ICMPC ^[3]	音楽知覚、認知	1989	隔年
DAFx ^[4]	音楽信号処理	1997	毎年
ISMIR ^[5]	音楽情報検索	2000	毎年
NIME ^[6]	音楽インタフェース	2001	毎年
EMS ^[7]	音楽学	2003	毎年
EMSAN ^[8]	アジア地域の音楽学	2008	毎年
MCM ^[9]	音楽数学、計算論的音楽	2006	隔年

音楽知覚認知研究の国際協調性がさげばれ、大串健吾、Diana Deutsch らが中心となって ICMPC (International Conference on Music Perception and Cognition) が京都で開催された [3]。2008 年にもわが国で開催されている。一方、音響信号合成などの音楽用信号処理技術は、ICMC 内でも扱われていたが、Daniel Arfib が主導したプロジェクトが発端となり、以降欧州を中心とした DAFx として継続している [4]。

一方、音楽を図書館情報学の枠組みでみると検索という問題も重要な問題として捉えられてきた。ISMIR (International Society for Music information Retrieval) は 2000 年に発足し、記号処理も信号処理も含めた音楽情報処理研究の中心的な場として確立された。わが国では昨年開催されている [5]。

また音楽工学の中で、新たな楽器やユーザインタフェースを制作する研究に関しても独立した国際会議 NIME が発足した。2004 年には長嶋洋一が中心となり静岡文化芸術大学で開催された [6]。

また、EMS (Electroacoustic Music Studies Network (EMS Network)) が本学会員である Marc Battier と Lee Landy により 2003 年に創設された [7]。ここではコンピュータ音楽とはいわず、電子音響音楽という名称を用いて、主に音楽学的な視点で研究を進める国際会議となった。さらに、この中の一分科会として、特にアジアの同分野の研究を行う EMSAN (Electroacoustic Music Studies Asia Network) が 2008 年に発足した [8]。

このほか MCM(Mathematics and computation in Music) という数理的、あるいは計算論的な音楽の研究分野の会議も発足している。ICMC はその中でもコンピュータ音楽初期の頃から継続してきた代表的な国際会議である。ところがこの国際会議に最近特徴的なことがある。ひとつは、工学系の研究者の多くが同会議からの撤退したこと、また、もうひとつは 2003 年以降アジアでの開催がないことである。

2.1. 国際音楽祭

前節で音楽祭ともいえる国際会議、すなわち、コンサートやインスタレーションなどの作品会を兼ねているのは ICMC のみである。国際会議というより、作品発表会を中心としてみると、Ars Electronica[10] など数多くの国際企画が存在する。また、さらに隣接分野に目をむけると現代音楽系の音楽祭、CG を中心とした Siggraph[11]、エンタテインメントの ICEC (international Conference on Entertainment Computing) [12] など枚挙にいとまない。本年も 11 月に台湾で Media Art 関係の DAF Taipei (Digital Art Festival Taipei)[13] などが誕生しており、多くの作品発表の場が誕生し、継続している。

3. 東アジアの国々の国際会議開催状況

筆者は本年秋に中国、韓国、台湾の三カ国を視察した。この体験を基に、現在東アジアで開催されている国際音楽祭の現状を述べる。

3.1. 中国

1999 年に ICMC が北京で開催された。ただし、これは実質的なプロデューサーが Josef Fung という個人に強く依存し、大学が主催しなかったため、この流れは踏襲されず、単発で終わった。しかし、2005 年以降は Musicacoustica in Beijing という国際音楽祭を毎年一回の頻度で中央音楽学院が主催し、開催している [14]。これは一週間程度の日程でさまざまなコンサートが開催され、アジアの中では定期開催される音楽祭の中で最も大規模である。

本年はドイツと日本がゲスト国となるなど、2カ国程度を毎年ゲスト国とし、その国で 1 コンサートを構成する程度の作曲家を招待している。マスターコースが併設され、学生の教育プログラムはあるが、研究発表は EMSAN(2 章参照) が入れ子になって併設される以外はない。この会議は主に音楽学の分野の研究発表で、会期中の一日に開催される。筆者は 2008 年と本年参加した。図 1 は本年のリハーサル風景である。

3.2. 韓国

韓国も大変活発で、SICMF (Seoul International Computer Music Festival) という国際音楽祭を毎年開催している [15]。本年で 17 回目を迎えた。しかし、この音楽祭は基本的には韓国の国内音楽祭の色彩が強い。ゲストとして海外から招待されるが、実質的に海外からの任意の参加者は非常に少ない。

3.3. 台湾

2005 年以降 WOCMAT (International Workshop on Computer Music and Audio Technology) と呼ばれる国際会議が毎年開催される [16]。本年は筆者が招待されて発表してきた。台湾は国土が狭いこともあるが、その中でコンピュータ音楽の作曲家がまとまり、毎年国際音楽祭を開催している行動力は驚嘆に値する。ただし、ここでの国際も、実質は国内音楽祭にゲスト作曲家および研究者を招待しているものである。図 2 は本年元智大学で開催された際のポスターセッションのシーンである。

3.4. シンガポール

シンガポールは 2003 年に ICMC が開催されて以来、大きな音楽祭は行われていない。一方、NUS (National University of Singapore) ではコンピュータ音楽に関連する研究組織が充実しており、研究面で期待できる。

3.5. わが国

わが国では 1993 年に早稲田大学で ICMC が開催された。しかし、その後 ICMC を開催する機運はない。また、2004 年に NIME が開催されたが、その後の動きはない。一方、ISMIR などの工学研究者主体の学会は 2009 年に神戸で開催されるなど活発である。しかし、音楽制作者を中心にまとまる動きがみえなかったため、昨年本会が設立され [17] このような活動を支援する母体にもなりえるようになった。

3.6. アジア固有の問題点

アジアとはいえ実質的には東アジアであるが、この地域はここ 10 年くらいで非常に活発になってきた。共通の特徴は以下のとおりである。

1. 毎年国際音楽祭 (国際会議) が開催される。
2. 国際という看板が掛けられているが、実質的には国内音楽祭である。
3. 研究発表は一般に貧弱である。
4. わが国は歴史的に西洋音楽の導入がもっとも早いにもかかわらず (のためか) コンピュータ音楽の国際イベント開催の機運がない。

2. は、外国からの参加者はいるが、多くがゲストとしての招待である。内外の参加者数のバランスが通常の国際会議に比べて極端に悪く、国内がほとんどであり、外国からはほんの数人程度の参加者数である。

3. は、いくつかの要因がある。韓国の例のように、研究者の存在そのものが少ない場合がある。中国は、音楽

院が主催ということで、研究者が企画に組み込まれていない。

台湾は唯一バランスよく研究と音楽発表がなされている。

以上のように、隣接芸術分野は活発であるにもかかわらず、わが国を含めたアジア地域のコンピュータ音楽制作発表は国際会議 (音楽祭) という視点からは貧弱なものである。

4. ACMP (ASIA COMPUTER MUSIC PROJECT) の提案

以上の現状を鑑み、前章までに紹介した既存の音楽祭に欠落している視点を補完することを狙いとして、ACMP (Asia Computer Music Project) という名称でアジア発の固有のコンピュータ音楽イベントを提案する [18][19]。具体的な特徴は以下のとおりである。

1. アジアを中心とするが、これに限定はしない。
2. ACMP の委員会メンバーを単一国としないで、できるだけアジアの参加国から運営委員を募り、この委員会を中心に運営を進める。
3. JSSA からは ACMP の国内委員会という形でメンバーを選出し運営を行う。
4. 研究発表の場とも位置づけ、コンサートなどの音楽制作発表の場と研究発表の場を必ず併設する。
5. 毎年 1 回以上コアイベント (音楽祭) を開催。
6. オプションの企画として、形にとらわれず、Us-stream のみの配信など柔軟に取り入れる。
7. 社会との接点をより強く意識した企画とする。

1. は、これまでの会議が国際といいながら、国内の色彩の方が強いことを勘案し、背伸びをしないネーミングとしたい。すなわち、実質は国際を狙い、アジアに限定する意図はないが、名称において限定することにより、対象を国際より小さく絞る。

7. は、抽象的な表現だが、現代音楽を愛好する層よりも広範な層を取り込むための努力を行う必要がある。そのためには映像などの視覚的要素を効果的に取り入れることが重要になるであろう。また、Siggraph がファインアートから商業的な作品までさまざまに分布した作品のクラスを取り扱っていることもヒントになろう。

4.1. 2010 年度の開催

前節の構想で関連諸国の関係者と調整を始めた。まず、ICMA のアジアオセアニア地区の副会長である韓国の作曲家 Seongah Shin にこの構想を披露した。しかし、他国に分散している作曲家のコンセンサスを短期間で得るのは困難であるため、まず二国で開催し、これを機



図 1. ACMP2010 のプログラム (表面)

軸に発展させるべき、という考えを示し、筆者もこれを了解し、まず ACMP の初回開催として日韓での音楽祭を実施した。図 3 はこのときのプログラムの表紙である。ハングルと英語が混在しており、残念ながら英語での統一表記とはなっていない。この音楽祭は Daegu の Keimyung University (啓明大学) の音楽学部を共催として 10 月 12 日に同大ホールにて行われた。図 3 にコンサートでのプログラムを示す。わが国からは、中村滋延、仲井朋子、森威功、根本翔多の各氏と筆者が参加した [19]。

4.2. 今後の予定

現在は、まず各種企画の立案と、それらを推進するための各国からの代表を集めた運営委員会を立ち上げつつある。こうした中、次回の開催は未定であり、わが国での開催も視野に入れて具体化していきたい。調整の内容は先に紹介した中台韓各国の毎年開催企画の合間を縫う別企画とするか、またその中の 1 イベントとして併設するのか、などである。

同委員会の国内委員会のメンバーになりたい方を募集しているので、活動に興味ある方は是非声をかけられたい。

5. おわりに

アジア地区の国際音楽祭の現状を紹介し、新たに ACMP を立ち上げた。また、2010 年に初めての音楽祭を韓国で実施した。通常国際会議は、他国際会議の開催時に設けられた 1 テーマのセッションや、研究プロジェクト発表の場など各国の関係者が集まる機会に意気投合して新たな会議の案が生まれ、翌年から独立して開催されることなどが多い。本会はその工程を経ていないため、発足そのものが容易ではないが、本稿のような広報も含めて啓蒙を行っていく。今後は毎年開催に向け努力を払いたい。



図 2. Music Acoustica in Beijing 2010 上：筆者の作品のリハーサル風景、下：他邦人作品のリハーサル風景

6. 参考文献

- [1] <http://www.aes.org/>
- [2] <http://www.computermusic.org/page/23/>
- [3] <http://www.icmpc.org/conferences.html>
- [4] Xavier Serra, "The Origins of DAFX and its future within the sound in music computing field," *Proc. of the 10th Int. Conference on Digital Audio Effects*

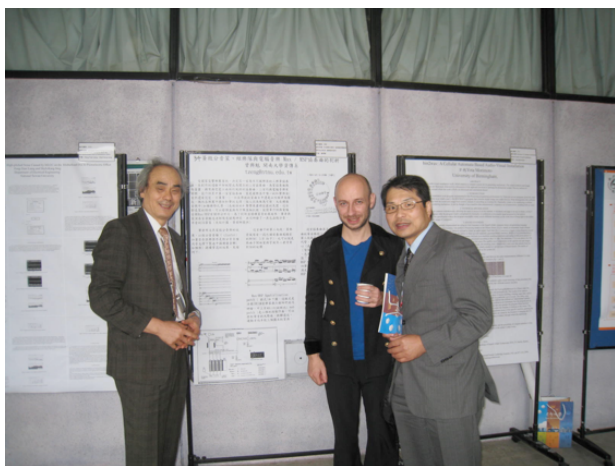


図 3. Wocmat 2010 のポスターセッションでの風景
Shing-Kwei Tzeng(左), 招待講演者 Olivier Pasquet(中),
筆者(右)

ツのための音響情報処理の教育と研究に従事。また、音楽制作および発表活動も行う。これまでに電楽 II、NTT コンピュータ音楽シンポジウム (1997,2001)、メディアフェスティバル in けいはんな (2001-2004)、メディアプロジェクト (2006-)などを企画。日本音響学会、電子情報通信学会、情報処理学会、ICMA, IEEE, 日本電子音楽協会 各会員。東京電機大学未来科学部教授。本会会長。

(DAFx-07), Bordeaux, France, 2007.

- [5] <http://www.ismir.net/>
- [6] <http://www.nime.org/>
- [7] <http://www.ems-network.org/>
- [8] http://www.omf.paris4.sorbonne.fr/article.php3?id_article=678
- [9] <http://www.smcm-net.info/>
- [10] <http://new.aec.at/news/en>
- [11] <http://www.siggraph.org/>
- [12] <http://icec2010.or.kr/xe/welcome>
- [13] http://www.dac.tw/daf10/home_en.html
- [14] <http://en.ccom.edu.cn/pae/bma/index.shtml>
- [15] http://www.computermusic.or.kr/main_en/
- [16] <http://wocmat2010.infocom.yzu.edu.tw/eindex.html>
- [17] Osaka, N: *Journal of the JSSA*, Vol. 1, No. 2, pp. 1-5, 2009. <http://www.jssa.info/>
- [18] Osaka, N., Shin Seongah, and Lonce Syze, "Founding a new regional computer music workshop in Asia", *Proceedings of ICMC 2010*, New York,
- [19] <http://www.acmp.asia/>

7. 著者プロフィール

小坂 直敏 (Naotoshi Osaka)

昭 51 早大理工電気卒。昭 53 同大学院修士課程了。同年日本電信電話公社 (現 NTT) 入社。以来通話品質の研究、音声対話の研究、コンピュータ音楽あるいはマルチメディア創作のための音響研究などに従事。平 6 早大より博士 (工学)。平 8-14 コミュニケーション科学基礎研究所音表現およびメディア表現研究グループリーダー、平成 15 東京電機大学・工 教授。メディアコンテン